

日中間に隔てなし

——文学は国境を越えて

作家・評論家・日本文芸家協会会員 稲垣真美



「日中間に隔てなし」と私は実感によって言うのです。

戦前の小学校5年のころ、私の育った京都の洛北の家に、京都大学医学部の王和成という中国の青年が時々訪れて来ました。上海市政府の局長の子で、旧制一高の特設高等科の理科に留学して京大に進学したのですが、今でも覚えていますのは、一高の寮生活でいい友達が出来たと話したこと、もう一つは、その後盧溝橋事件が起ってから、彼が母方の実家のある北京に帰省して戻って来た時、中学生の私に、戦禍で同胞が殺戮されているのを見てたまらなかったと言い、

「君は戦争をどう思う？ ぼくはもう戦争のニュース映画や新聞記事も見たくないね」と問いかけたことです。それで私の戦争観が変わりました。

王さんは京都の女性と結婚して中国に帰り、医師となって、戦後、北京の病院長を務めました。1966年に文化大革命によって拘禁され、山西省の監獄で病気になる、必要な薬も与えられぬまま69年12月獄死しました。後に名誉回復はされましたが、その後半生知るにつけ、一層慕わしく思うのです。

もう時効ですが、戦中やはり一高の特高科から京大に籍を置いた中国留学生を、家に暫くかくまったことがあります。彼は九光会という「愛国抗日」の留学生グループのメンバーで、まもなく故国に脱

出しましたが、私の母のことを仲間と「お母さん」と呼んでいました。

戦後、一高の寮で黄彩延君という中国留学生（のち青森の病院長）と同室になりました。食糧難の最中でしたが、日曜の前日、「ぼくは友達のところへ遊びに行くから、これ全部食べていいよ」と2升も入った取って置きの米袋を私の足元に置きました。

中国の人といえば、こんな記憶しか私にはありません。さらに1983年、私は空海の遣唐僧時代の事蹟を調べる必要があつて、中国へ行きました。北京で作家協会の歓迎を受け、西安、洛陽、五台山、紹興、上海、杭州、寧波などを周りましたが、その途中、上海に着いたとき、それまでの案内人と異なった感じの旅行



尾崎秀実

社の女性が、ふとこう言ったのです。「上海には自由があります。北京とは違います」

そのころの上海はまだビルといえは古い租界のもので、郊外に建ちかかったホテルや、自由市を許された農家の新築が目につく程度でした。

ところが20数年後上海を再訪した私は、人口1900万に達したそこに、ニューヨークのブロードウェイ、マンハッタン、元の貿易センタービルあたりまでをそのまま摩天楼ごと10あまり移したほどの変貌ぶりに驚くことになりました。同時に、上海には自由がある、と言った嘗ての人の言葉も蘇りました。

上海に知り合いもできて、長江（揚子江）の河口に崇明島（崇明島）という佐渡島ほどの中州の島があり、自然がとり残されたように生きているのを知りました。そこに



郭沫若

二

元知事の家族が文化大革命で不幸な目に遭い、今も立ち直れないでいるのに出会い、及ばずながら支援することになり、その家族は私を「お父さん」と呼んでくれています。

昨年ノーベル文学賞を受けた中国の作家・莫言（モ・イン）の作品を多く訳した中国文学者の吉田富夫氏は、古くからの友人ですが、莫言との隔てない交遊を通じて「中国と日本は親戚みたいなもの。時にけんかしても、いざとなれば親身につきあえる」と言いましたが、私はもっと肉親に近いふれあいを信じております。

しかし、日本人一般の多くは、なお戦前並みの中国乃至中国人観から抜けきれないように見受けられるのは、残念

なことです。戦後世代の家族間ですら、中国や中国人に関して、何らかの偏見なしに会話を運ぶことは少ないのではないのでしょうか。

戦前はその傾向が甚しく、軍部の戦略に拍車をかけました。それが、戦後60年以上経っても大して変わらないのなら、まことに奇妙なことです。中国及び中国人の側でも同様だとしたら、それは互いに知らなすぎる、無理解が障碍となっているにちがいありません。

その相互の無知と無理解を除こうとしたので想起されるのは、尾崎秀実氏（1901〜44）のことです。尾崎は台北育ちで、1925年に東京大学法学部を出て朝日新聞社に入り、28年に上海支局に赴任します。そこで彼は通常の特派員や記者のレベルを越えて、中国と中国人への理解を深めようとしています。

赴任に当って、一高以来の先輩・羽仁五郎から、彼のハイデルベルク留学中、下宿で一緒だった大内兵衛、有坂広己両氏（ともに戦中に思想弾圧の迫害を受け戦後東大経済学部教授に復活）が、日常如何に深くドイツの国情を知ろうとしたかを見聞を例に、中国の表相だけでなく、真底にあるものを把握せよとアドバイスされる。そこで尾崎は、中国の経済や諸



戦前の上海

外国との貿易実績の精密な統計を入手する一方、民衆や解放運動を内側に入りこんで知ろうと努めます。同時に、かの魯迅に会い、敦沐若の率いる文学サークル・創造社に拠る田漢、郁達夫、陶昌孫らの進歩的文学者たちともつき合う。中国共産党の秘密組織の活動家とも接触しながら、東亜同文書院で日本の行方を憂える祖国の学生たちを支援して、読書会を組織することも手伝います。そのような日常と歳月を重ねながら、尾崎は、貧困にあえぐ中国の民衆の息吹にふれ、その底に革命や改革への燃え上がる意思の胎動を体感したのです（『女一人大地を行く』（白川二郎のペンネームで尾崎秀実が訳出）のアグネス・スメドレーや、ゾルゲからの接近などは副次的なことにすぎません）。こうして尾崎は、内から変容する中国を上海にいて会得しながら、19



魯迅

32年、帰国しました。

帰って来てからも、尾崎は35年当時の中国への英・独・日・米の経済進出の動向を数字での確にとらえた論文や、中国ソビエト（解放区）の建設に長征する人民解放（共産党）軍と、それに手こずる国府軍の趨勢を、公刊の雑誌に報告しています。

1936年12月には、張学良が西安に蒋介石総統を監禁する「西安事件」が起きました。このとき張は蔣を暗殺などせず、国共合作を画するという予測をピタリと言い当てたのは、並みいる中国問題評論家の中で尾崎秀実だけでした。

その翌年の37年6月から第一次近衛文麿首班の内閣が発足し、7月に盧溝橋事件を起こす。以後泥沼化して拾収つかぬまま大東亜戦争にまで到り、45年8月敗戦によってようやく終わる最悪のシナリ



近衛文麿

オの始まりでした。

この間尾崎は近衛に近い昭和研究会のメンバーに加えられ、38年7月からは近衛内閣の囑託にもなっています。しかし、近衛は39年ごろからしきりに日中和平を唱えながら、蒋介石の国府を相手にせずと称して、汪精衛の傀儡政権と結ぶという愚策に甘んじ、決定的に局面を悪くしました。中国民衆を結集するものは何かを知る尾崎がそのような策を考えるはずはありません。

すなわち近衛は、中国を真底から知ろうとした尾崎をブレンとしながら活用することをせず、空しくスパイの汚名を被る立場にのみ追いこんだことになります。挙句にすべてを軍部に丸投げして、日本を敗戦の淵に沈めました。

三

そこで、戦後ということになりますが、日本と中国では大きな違いがあります。日本は敗戦国ながら、間もなく朝鮮戦争で思わぬ特需を得て、そこから繁栄が始まり、その延長上に何となく現在がある状態です。ところが中国は勝つには勝ったが、それからが大変でした。

国共の内戦を制した共産党によって中

華人民共和国が樹立され、毛沢東の施策下、土地改革、農村の人民公社化の激動があり、1950年代末には大躍進政策が唱えられましたが、その半面、農村が疲弊して数千万人の餓死が出る事態も起ります。

それに対する経済政策はとられたものの、66年から文化大革命が始まり、中国全土に紅衛兵が跋扈して、手当たり次第に有産階級や知識人の家を襲い、有形・無形の文化の破壊活動が行われます。造反有理の言葉は日本の学生運動にも伝えられました。中国でのそれによる死者は何十万とも何百万とも伝えられます。これに続く都会の若者たちの強制的な農・漁村への下放がやっと終るのは、70年代に入ってからでした。

現在の中国は、心ある人々が「悪しき資本主義」と憤るのをよそに、アメリカ



莫言

をしのごく経済大国の様相ですが、ここまて来るのにはずさまじい変転があり、中高年の人々はそれを生き延び、1980年代以後に生まれた若い層は、両親は不幸な時代をくぐり抜けた、と自覚しています。こういうのが日本及び日本人との間にあることを、理解してかからねば、相手に親身にはなれません。

話を主題の文学に移すならば、中国の現代の文学者たちは、みなこの激動を生きて体験し、生き抜くことによって書き、苦闘し、苦悩し、抑圧され、はね返し、また書くの繰り返しです。もう書けない、という詩人までいます。特高（特別高等警察）その他による弾圧のあった戦前の日本ならいざ知らず、現在の日本の文学状況とは全く異なります。

典型的な二人の中国の作家とその作品をご紹介します。一人は莫言（モ・イン）、昨年ノーベル文学賞を受けました。次の一人は余華（ユ・ホア）、『活きる』という長編が代表作で、映画化もされカンヌ映画祭で審査員特別賞になりました。

まず、莫言は、1955年山東省の青島と済南をつなぐ鉄道沿線にある高密県東北郷の農家に生まれ、今もそこに住んでいます。幼児期、飢餓状態が農村を襲ったとき、石炭を発見して食べた経験もし

ています。小学5年のとき文化大革命に遭い、中農の子だということで教室から引きずり出され、学校の塀の外で牛番をさせられる。江青ら4人組の失脚後、大学進学の可能性は開けるが、貧農の子が優先で、中農生れの莫言はそれもダメ。実兄は上海華東師範大学を出ているのに、です。

何とかして前途を開きようと、莫言は軍隊に入ることになりました。年齢超過でしたが1歳若く偽り、親戚のコネで村の書記の許可をとりつけ、やっと解放軍に入隊を果たします。物語りの才能に恵まれていた莫言は、やがて宣伝の任務につき、軍の機関誌に小説めいたものを書くようになります。しかし、それは軍隊用語や教条に制約されたものでした。

たまたまある日、彼は日本の川端康成の『雪国』を読みます。そして次の行文に出会ってハッと驚くのです。啓示を受けるのです。

『黒く逞しい秋田犬がその踏石に乗って長いこと湯を舐めていた』『雪国』

「そうか、小説は犬が出てきてもいいのだ。そして温い湯も——」。気がついた莫言は『白い犬とブランコ』（1985）という小説を書きました。その書出しは「高密県東北郷原産のおとなしい白犬は

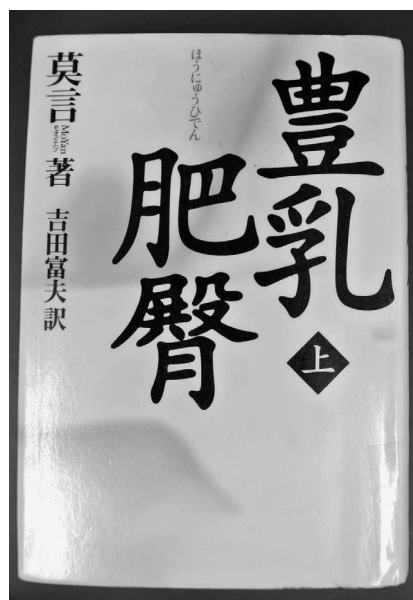
——」。物語りの中身は、1980年代に町で教師になっているボクが、10年ぶりに故郷の村に帰る途中、高粱を背負った女性に出会う。彼女は昔の恋人で、片目です。2人でブランコに乗って遊んでいたとき事故のため片輪になりました。そのため口のきけない男としか結婚できず、3つ児が生まれましたが、みな口がきけない。彼女はそんな告白をしてボクに言います。

「物の言える子どもがほしいわ。よし、と言ってくれたら私は生きていく。ダメと言ったら死んでしまふ。ネ、どうなの？ 言いわけは聞きたくない」

片目しか見えないまま農村にとり残された女性、物も言えない子どもたちしか産めない運命、そこから必死で脱け出そうとする姿——ある寓意を莫言はこめていたようにも思えます。

以後、莫言は立てつづけに『透明な赤蕪』『赤い高粱』など、いずれも故郷の農村を舞台の秀作を書きます。映画化もされ、外国の賞も受けました。そして1995年、8万字に及ぶ大作『豊乳肥臀』を完成します。

『豊乳肥臀』の主人公ともいえるのは、上官魯氏という農家の母親です。この母



『豊乳肥臀』

はゴリキーの『母』をしのぐすさまじい一生を送ります。小説は前の大戦中に村が日本軍の進攻に遭うところから始まります。上官魯氏は何とか男の子を産もうとして次々7人の子を産みますが、みな女の子でした。その名前も「来弟」とか「招男」とか「想弟」とか、次には男の子を、との願いがこめられていました。しかも魯氏の夫は精子に恵まれず、子どもたちの男親はみな違うのです。そしてこの女の子たちは成長すると、抗日大隊司令の第3夫人になったり、共産党軍のリーダーと結婚したり、皇軍協力軍司令の妻になるものもいて、旦那同士はすさまじい戦闘をくり返します。5女はアメリカ空軍の軍人の妻となり、4女は遊女屋に自ら身売りする。



余華

まことに戦中、戦後の中国を反映して娘たちの生きざまは多様多彩ですが、子どもができるのみんな母親の魯氏に預けにきます。そこへ農村飢餓の時代、魯氏はその孫たちを飢えさせまいと、豆を飲みこんで来て吐いては洗って食べさせます。このため魯氏は内臓を病み、痩せ衰えつつ最後の恋を異人の牧師と生命がけでします。双児が生まれ、その一人は念願の男の子でした。

物語はまだ続きますが、莫言はノーベル文学賞の受賞講演の冒頭で、てん足に前時代の名残りをとどめながら、どんな困難な事態にも子どもをかばい続けてくれた亡母を偲んだそうです。そういう母の面影を、主人公に託し、彼女とその肉親がそれぞれに戦中、戦後の中国の農村での歴史的に地上を体現する構成が、作品に無限の深まりを与えています。

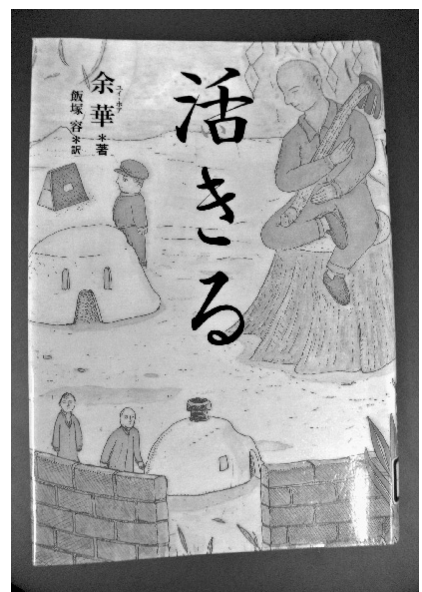
次に『活きる』の余華は1960年杭州の生まれで、両親はともに医者、自分自身も一たん歯科医になりましたが、やめて1983年に海塩県や浙江省嘉興市などで文化関係の職を得て、創作を始めました。1990年から翌年にかけて北京師範大学と魯迅文学院が共催した創作研究班に学んで、莫言とも交流したそうです。以後北京に定住して長編『雨に呼ぶ声』

を書き上げます。それより前には文化大革命時に失踪して発狂した男を描いた『一九八六年』（87年）、幻想小説的な『世事は煙の如し』（88年）などを発表していました。

代表作となった『活きる』は初め92年に中編として上海の文芸誌『收穫』に発表。その後映画化が決まって長編化され、92年に長江文芸出版社から刊行されました。

民間の歌謡収集の旅に出た若者が、とある農村で老牛を相手に一人田を耕す老人の歌に出会い、悲痛極まる、それでいて泣き笑いの生涯の話を聞く、という設定です。

福貴と名乗る老農夫は金持の地主の息子でしたが、イカサマばくちにやられて



『活きる』

土地を失う。しかし戦後土地を奪った男はかえって地主ゆえに告発され銃殺される。福貴は助かったもののボンボンで乱世について行けず、世をすねた農夫として辛くも生計を営むほかない。歯医者娘だった妻にも、息子にも先立たれる。最後に望みを託した亡き娘の生んだ孫や婿にも死なれて、天涯孤独に細々と農耕をつづけるほかなくなった福貴は、相棒にするべく、牛を市に買いに行きます。

そこでは買手のつかない役立たずの牛は屠殺場に送られます。老牛が一头その運命を予知して、地面に水溜りができるほど涙をポタポタ落としていました。福貴は、笑われながらその牛を買ってきて余生をともしることにしたのでした。

余華はもととも知識階級の家庭の出身

ですが、莫言と同じように中国の現代までの国情と世情を体感しながら、それを一人の人間に襲いかかり、奔ろうする変転としてとらえ、そこはかかない哀歓をこめて『活きる』に表現しています。それがわれわれの市民感覚をも動かすように思えます。

四

戦前の1930年代の中国で、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を全訳した傳雷という文学者がいました。1908年江蘇省の裕福な地主の家に生まれ、フランスに留学してロマン・ロランの『ペートル・ヴェンの生涯』に感激して、西洋美術や音楽への造詣も深めた人です。戦後、息子の傳聰がポーランドに留学して、アシュケナージなどとピアノ・コ



芒克

ンクールの首位を競い、有名なヴァイオリニスト、メニューインの娘と結婚しました。その留学中の息子に宛てた手紙の中で傳雷はこんなことを言っています。

「(君は) ショパンのエチュードまたはスケルツォの速いパッセージを練習するのに、いつも速度が足りないとかぼしていますね。しかし速度が十分になったら、君の音楽表現は今追い求めていくものとはきつと違ってきます。

もしこの憶測に間違いなければ量的変化が質的变化をもたらすという道理に説明がつくでしょう」

「中国は古代以来物に執着せず、物に支配されないことを最も重要な人生哲学としてきました。私たちの中に守銭奴がいらないわけではありませんが、モリエールやバルザックの描いた守銭奴や野心家に比べたら見劣りしてしまします。中華民族の大多数の者は性格が穏やかで淡泊、素朴で、西洋人よりも容易に満足することができます」

(榎本泰子訳)

しかし、音楽をマルキシズムでとらえようとし、中国の伝統思想の持主でもあった傳雷は、文化大革命が始まるや、迫害



『芒克詩集』

にさらされ夫人の朱馥梅とともに1966年11月自殺を余儀なくされました。すぐれた現代詩人の一人として芒克とその作品も紹介しておきましょう。

芒克は1950年遼寧省の瀋陽に生まれます。北京の高校を卒業後、下放で河北省白洋淀の農村に過ごし、その生活に根ざした詩を1970年代から書き始め『思ひ』にまとめました。「元氣かい、獬師の足弟」の呼びかけに始まる、素朴で温もりのある「漁師の兄弟たちへ」など初期の詩が入っています。

76年に芒克は北京に帰り、工場で労働しながら78年末、詩の仲間たちと雑誌『今天』を創刊して、詩や評論に新しい朝を開こうとする運動を展開しようとしてきました。しかし旧時代の公認作家・評論

家たちは、地下文壇視された『今天』の新しい詩を「朦朧詩」と呼んで受けつけず、『今天』の雑誌そのものも官憲によって不法出版物とされ、編集責任者は投獄されることになります。『今天』の詩歌は中国20数省の大学、高校生、若者たちに熱烈に迎えられていたのに、です。

芒克は工場を解雇され、『今天』も廃刊となりましたが、以後職につかず『旧き夢』（81年）、『陽光の中の向日葵』（83年）、長詩『群猿』、組詩『時間のない時間』（87年）等の詩集を出して文学活動を続けました。

その中の1篇「鼠害」（86年）から、芒克が高校生時代に身につまされ直に体験した、文化大革命の現実を顕在させたとされる詩句をここに引いて置きましょう。

*
やつらは獐^{どうもう}猛

子供の耳に食いつき、女の股^{もも}を噛じる

やつらは狂ったように男の頭をコッ
コッ叩く

カッパルの蒲団をいやしげにめくる
物と見ればたたきこわし、鍵と見ればこじあける

それにやつらは糞尿を気持ちよさそ

うに

老人の口に流しこむ

やつらは丸裸の若い女を跪かせ

皮のベルトでかわるがわる堪能する

まで鞭打つ

やつらは若者をとりかこんで

棍棒で両のあばらをこれでもかと突き上げる

やつらはばあさんの胸をなぐり

じいさんの股間を蹴り上げる

やつらは娘っ子の髪の毛を

よってたかって ひっつかみ

主にする 丸坊

やつらは目にとまるものは 何でも

かっさらい

おいしいものと見れば貪^{むさぼ}り食う

やつらは他人の家を

娯楽場や拷問部屋にする

（「鼠害」より、是永駿訳）

*

『今天』の執筆者の多くは作家協会に吸収されましたが、芒克は行きませんでした。いま絵を書いているそうです。

私は日本ペンクラブの国際委員を務めました。こういう中国の文学状況について精しく話されたことはなかったと思います。国境を越えた活動が建前のはずのペンクラブにして、その仕末です。ま

して、ふつうの日本のだれ彼が、どれほど中国の現代の歴史的状況や、それを真摯に体现している文学について知っているでしょうか。まず知らねばなりません。

莫言のよき翻訳者である吉田富夫氏（佛教大学名誉教授）は、莫言を日本に自費で招^よんで、広島県の故郷の農家である実家に案内した時、農民の莫言と本当に心の隔だてもなくなり、囲炉裡端で一晩中語り合かし、雑古寝^{ぞこね}したと言います。日中間では雑古寝の間柄すらも出来ないことではないのです。

「日中間に隔てなし」はかくして夢・幻には終わらないのです。

（10月4日・講演会）

講師略歴（いながき まさみ）

1926年 東京都生まれ

1955年 東京大学大学院美学専攻

終了

1965年 『苦を紡ぐ女』で作家に。

その後、文学のかたわら日本酒の研究にもうちこみ「全国酒類コンクール」

を主宰

著書『旧制一高の文学』『ほんものの日本酒選び』など多数。

《公開講演会記録》

莫言と村上春樹チルドレン

——現代中国文芸界をめぐる

東京大学文学部教授 藤井省三



現代中国文芸界における「純文学」の

風景は、大別して、いかに近代化の洗礼を受けようともなおも土着文化を色濃く保つ農村を描く作品群と、日本・欧米のポストモダン文化を大胆に取り込んでグローバル化した都市を描く作品群との二種により、構成されているのではあるまいか。そして土着派文学の代表的作家が莫言（モイーエン、ばくげん、1955～）であるとするならば、グローバル派文学の代表的作家が安妮寶貝（アンニー・パオペイ、Annie Baby、アニー・ベイビー、1974～）ら村上春樹チルドレンといえよう。

本稿では土着派莫言とグローバル派村上チルドレンという中国文芸界の両極をご紹介したい。

(1) 莫言——中国農民の情念を描く
農民作家としての出発

中国の村から現れた魔術的リアリズムの作家莫言が、ノーベル文学賞を受賞した。中国語作家としては2000年受賞の高行健（カオ・シンチェン、こうこうけん、1940～）に続く2人目であり、中国国籍の作家としては初めての受賞である。

私の莫言文学の読書歴は25年、中国のメディアも含めて最初に彼に対し本格的インタビューを行ったのは、おそらく私であろう。莫言の故郷の山東省高密の村まで、彼の父上と兄上たちを訪ねたこともあり、今でも東京や北京で毎年のように顔を合わせている。

さて莫言の経歴をめぐる、かつて中国共産党直系の文芸誌『人民文学』に奇妙な作家紹介が載ったことがある。それは莫言の長篇小説『歡樂』末尾に付されたものだ。

「莫言 山東省高密県の人。1955年生まれ。幼少より共産党を熱愛し、祖国を熱愛し、人民を熱愛し、労働を熱愛した。一個の光榮ある解放軍兵士となることが彼の生涯の望みであったが、兵隊になると共産党に入党したくなり、入党すると士官になりたくなり、士官になると今度は小説を書いて中国作家協会に潜り込みたくなった。現在彼は真面目にマルクス・レーニン主義を勉強し、誠心誠意祖国に尽くしたいと思っている。暮らしが厳しかった時期に、飢えのため彼の頭はおかしくなり、神経系統は余り正

常でなく、好んででまかせを言うが、口に出すとすぐに忘れてしまう。彼は批判精神と自己批判の精神とに富み、真理に対しては潔く投降してしまう。批判はむしろ歓迎するところで、恨みに思ったことはない。」(1987年1・2月合併号)

1991年12月に、私が北京で初めて莫言に面会しインタビューした時、冒頭で「これは莫言さん自身がお書きになったのですか」と確認したところ、「山東大人」風の大柄な彼が、あの大きな顔に悪戯っ子のような笑顔を浮かべて「そうです」と肯定していた。

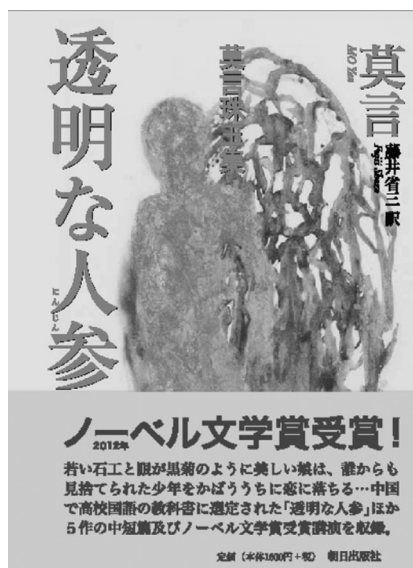
それから彼は、私が東京から持参した中華民国24年(1935)刊行の『高密県志』に収録されていた古地図を前に、農民作家として自覚を詳しく語ってくれたのである——彼の故郷は高密県新安郷の大蘭で、高密の東北端にあるので小説では「東北郷」と称すること、生まれ落ちたときから青春期までの20年を高密県の農村で過ごし、その体験は彼の創作活動に大きな影響を与えていることを……

「私は農民の子供として生まれ、小学校も中退で、幼年期から農作業をしてきましたから、農民の思考、行動様式が身に染み着いています。

農民の願望、現代の農民の情念にたいへん近いものを抱いています。私の眼差し、感受性は農民のそれです。」(注：「特別インタビュー 莫言 中国の村と軍から出てきた魔術的リアリズム」『海燕』1992年4月号)

莫言の父は人民共和國建国前には豊かな自作農であったため、建国後の毛沢東時代には政治闘争の対象となり、財産も収奪された。これについて彼は次のように述べている。

「建国後には中農など豊かな農家の子供たちは苦難の日々を過ごしました。常に人より一歩下がっていませんと労働改造(注：懲役受刑者を、生産労働と政治教育により更生させる制度とされるが、強制収容所の側面もある)に送られてし



『透明な人参』日本語訳の表紙

まうのです。……中農の子弟はあらゆる機会に差別を受け、出口無しの状態でした。プロレタリア専制下での抑圧であり差別であったのです。」

文化大革命(1966〜76)が始まった頃、莫言はある日お腹が減ってどうにも我慢できず、人民公社の畑からニンジンをはひっこ抜いて食べたところ、これが見つかってしまい、この厳粛なる文革の最中に公社の生産物を盗むとは何事かと村人たちの前で共産党支部書記から叱責され、毛沢東の肖像画に向かって跪き「毛主席、私はニンジンを一本盗みました。この罪は死んでも償い切れません」と謝罪させられたという。

父親も「毛主席に謝罪させられるような大それたことをするとは何事だ」と激怒し、塩水につけた荒縄で莫言少年を殴り始めたところに、祖父が駆けつけ「たかがニンジン一本でこんな折檻をすることもなかるう」といって助けてくれたのだった。祖父は常々「人民公社なんぞウサギの尻尾のようなもの。長く伸びるはずもない」と言っていたというが、確かに文革終了後数年で人民公社は解体され、農地は農民に再分配されたのである。このニンジン事件は後に、莫言の中央文壇デビュー作『透明な人参』に結晶するの

である。

そして莫言は自ら苦勞した人民解放軍入隊体験を、次のように語ってもいた。

「当時農村では、物質面で暮らしが非常に厳しかったので、衣食が保証されている軍隊はたいへん魅力的な社会でした。しかも士官に抜擢されれば戸籍を農村から移すことが出来ます。村から出る唯一の方法が入隊だったのです。そこで入隊希望者が非常に多く、各農村から入隊できる定員は毎年1人かせいぜい2人といった状態でした。入隊できる者はまず「人民公社の」幹部の子弟、次に出身家庭の良い（注：労働者、兵士、革命幹部、革命烈士そして貧農・下層中農を指す。いわゆる「紅五類（赤い五種）」）子弟でした……募兵があるたびに私は申し込みました。毎年毎年です。そして四年目にあまり正常ではない手段によって採用になりました。農村の幹部に賄賂を贈り買収したのです。ただし入隊後はこうした出身による差別はほとんどありませんでした。」

こうして1976年に解放軍の一兵卒となった莫言は、やがて分隊長に昇進し図書管理員などの職を歴任したのち、創作を開始した。最初の短篇は解放軍の隔月刊文芸誌『蓮池』1981年第5期に

発表した『春の雨降る夜に』である。創作の動機について莫言は1999年10月の来日時に京都大学で行った講演で、原稿料でピカピカの革靴や上海ブランドの時計を買って、故郷の村の娘たちに自慢したかったのだが、自分を眺めてくれたのは老婆数人だけだった、とユーモアたっぷりに語っている。

毛沢東は日中戦争中の1942年5月、文芸座談会を召集し、文学・芸術とは抗日戦と解放運動を闘う労働者・農民・兵士の要求に応じて大衆政治家の意見をまとめあげこれを精練し、再び大衆に戻すこと、すなわち共産党の政策を民衆に宣伝啓蒙し、民衆の要求を党に伝えるメディアであると規定した。これは『文芸講話』と呼ばれ、その後久しく共産党の文学・芸術に対する基本政策となっている。

莫言は「マルクス・レーニン主義を猛勉強し、誠心誠意祖国に尽くしたい」と思っていたというものの、おそらく『文芸講話』の理論で、農民の情念と論理をどこまで語れるのか、と悩んでいたのではあるまいか。

やがて1984年のある冬の夜、莫言は川端康成の『雪国』を読みはじめて、「黒く逞しい秋田犬がその踏み石に乗って、長いこと湯を舐めてゐた」という

一節に至ったとき——これは語り手の島村が芸者の駒子と再会するあたりの描写だが——突然、小説とは何か、を悟って感激にうち震え、激しい興奮を覚えたという。「犬も文学に書けるし、お湯も文学に書けるのだ！」

こうして読みかけの『雪国』を放りだすと「高密県東北郷原産の大きく白い従順な犬は、何代も続くうちに純血種は殆ど見かけなくなつた……」という一行を書き出したのである。これが1985年4月執筆と思われる珠玉の短篇『白い犬とブランコ』となるのだ。同作は初めて高密県東北郷を舞台とした莫言作品で、魯迅の『故郷』を彷彿とさせる帰郷の物語である。

主人公で北京の芸術専門学校の講師をしている青年は、10年ぶりに故郷の村に帰り、高く生い茂るコーリャン畑に囲まれた橋のたもとで、重いコーリャンの葉の束を背負い白い老犬に先導された片目の農婦に出会う。少年時代、彼が幼なじみの少女と村の広場に設営されたブランコに相乗りしていたときロープが切れ、彼の家の白い子犬を抱いていた少女が失明した。いま出会った農婦こそその少女であった。彼女は隣村の聾啞者に嫁ぎ三つ子を生んだが、3人とも父の遺伝で聾



『豊乳肥臀』の表紙

唾。彼女の家を訪ね、粗暴ながらも心根が優しく働き者の夫や幼い3兄弟と会い、青年の心も慰められる。彼女が老犬を連れて用事で町へ一足先に出かけたのち、青年も家を辞去すると、意外にも橋のたもとでは白い犬が彼を待っているのだった。老犬に導かれるままコーリヤン畑を踏み分けていくと……

『白い犬とブランコ』は文革期と80年代とを行き来しながら、貧困から小康へと経済成長していく農村社会と、思春期から大人へと成長する男女の心理の綾を描き、1989年に台湾の『聯合報』小説賞を受賞している。ちなみにこれは莫言が初めて得た外地の文学賞である。同作は同時期の作品『透明な人参』『古い銃』『秋の水』などとともに莫言第1短編集『透明な人参』（北京・作家出版社、1986）に収録された。中国農民の情

念を鮮烈に描き出したこれらの短篇群は、農民閭土がほとんど内面を語ろうとしなかった魯迅『故郷』とも対照的である。

(2) 莫言独自の中國魔術的リアリズム

こうして川端康成『雪国』が触媒として作用し、莫言は『東北郷』に象徴される自らの物語世界を発見するに至ったが、彼が農民の情念を父祖の代にまで溯って語るためには、さらに広大な時空を縦横に往来する長篇小説の技法も必要であった。それを莫言は南北アメリカ文学から探り出すのである。

莫言は1991年のインタビューで、84年に解放軍芸術学院に入学し、外国文学の講義を受けたこと、川端文学を読んだのもその時であったことを語ったほか、私の「アメリカ南部の作家フォークナーおよびラテンアメリカ文学のガルシア・マルケスのどのような作品を読みましたか」という問いに対し次のように答えている。

「たとえばマルケスの『百年の孤独』です。これは2、3ページ読むなり衝撃を受けまして、頭の中がどうしようもない興奮状態となってしまったのです。あつという間に私の頭の中で静まっていたあ

りとあらゆる現実が照らし出され、それぞれが自在に動き始めました。私は一刻の猶予もならず筆を執るや原稿用紙に向かったのです。とても一冊読み通して勉強するなどという精神状態ではありませんでした。マルケスの物語自体は私にとつてそれほど新鮮なものではなかったのですが、小説の手法というか思考の回路にたいへん啓発されたのです。」

中華民国時代の高密県東北郷を舞台に興亡する一族波乱の半世紀を孫の代の「私」が語る、という『赤い高粱一族』物語は、こうしてマルケスを触媒として生まれたようである。同作は目まぐるしく交錯する叙述の時空、拍案驚奇のエピソードをてんこ盛りにした豪快にして繊細な作品である。1920、40年代初期の山東省高密県東北郷自営農民の最も輝かしい時代を描きながらも、その冒頭では「今を生きる私たちこの不肖なる子孫のぶざまさを際立たせるのであり、進歩と同時に私は種の退化を痛切に感じるのである」という挫折感を語っており、全編に荒涼たる喪失感を漂わせている。このようなフラッシュバックの手法や入れ子状の物語構造に関しては、莫言は次のように語っている。

「フラッシュバックは修飾のための手

法と思っています。入れ子状の構造というのは、おそらく私の頭の中にお話がありにたくさん詰まっているためではないでしょうか。ある一つの筋を書いているうちに、別の筋が頭の中に浮かんでくると、私はそのことを書かずにはいられなくなりまふ。それを書き終えてからまたもとの筋に戻るのです。こんな具合で、頭の中にお話が詰まりすぎているのです。」

つまり莫言の頭の中に中国農民の情念と歴史の記憶を土壤とする豊饒なる物語の森が生きており、それを彼の筆が描き出す時、中国的魔術的リアリズム作品となるのである。

続けて1992年に脱稿する『酒国』は、大鉾山の街酒国市で政府幹部が酒宴を開いては、農村から購入した幼児の肉料理を食べているとの情報を得た特捜検事による潜入捜査の物語だ。「莫言」という語り手による捜査経過の叙述、酒国市醸造大学の院生兼小説家志望の李一斗と莫言との往復書簡、そして李が研究室収蔵の洋の東西の銘酒を盗み飲みしながら書き上げて莫言に送りつける奇怪な短編小説群という3重のテクストから成り立ち、中国魔術的リアリズムの極北として高く評価できよう。莫言自身も99年の京大講演で「私の作品のなかで、もっ

とも完成度の高い長編小説だと考え、誇りをもっています」と述べている。

『豊乳肥臀』（1996）も高密県東北郷を舞台として、日中戦争から改革・開放が本格化する80年代半ばまでを描いている。日本軍が東北郷に侵攻してきたその日、18歳を頭とする7人の娘を持つ農婦がスウェーデン人宣教師との奔放な不倫により宿した男女の双子を生む。一族待望の男児にして語り手の「私」は母の豊かな乳房を独占し、7歳になりその乳が枯れたのちも羊の乳を飲み続ける。いっぽう東北郷の男たちは次々と抗日軍を組織し、母から豊かな乳房と肝っ玉を受け継いだ姉たちは戦乱期の有力者たちと愛し合う。乳房コンプレックスの「私」による豊かな乳房に肥えた尻を誇る母や姉たちの数奇な生涯をめぐる物語を通じて、農民英雄たちの日中戦争期の戦いぶりから、人民共和国建国後の悲惨な末路までを描き出すのだ。

『白檀の刑』（2001）も高密県を舞台として、19世紀末に鉄道、大砲の轟音と共に侵攻するドイツ軍とこれに迎合する野心家袁世凱に対し、ニャンニャンと伝統歌舞劇「猫節」の歌声で抵抗する中国民衆、およびその牧民たる知事の責務と清朝への忠誠との間で苦悩する県知事

らを描く。莫言最初の歴史長篇小説として注目されている。

『赤い高粱一族』『酒国』『豊乳肥臀』『白檀の刑』の4大長篇が、莫言の中国魔術的リアリズムの代表作といえよう。

(3) 東アジアにおける村上春樹

村上春樹は日本の現在を東アジアの時間と空間に位置づけた作家であり、東アジア共通の現代文化、ポストモダン文化の原点となった作家である。

実際に村上文学の主人公は東アジアの歴史の記憶を辿る大小の冒険を繰り返してきた。デビュー作『風の歌を聴け』（1979）の「僕」は、「ジェイズ・バー」のマスターに「上海の郊外」で「終戦の2日後に自分の埋めた地雷を踏ん」で死んだ叔父のことを語っている。その彼を「そう……。いろんな人間が死んだものね。でもみんな兄弟さ。」とやさしく受け止めてくれる中年の男のジェイは中国人である。実は彼は朝鮮戦争とベトナム戦争という中米両国激突の時代に在日米軍基地で働いていたのだが、そんな暗い過去を明らかにするのは、「僕」とその親友の「鼠」が満州国の亡霊と対決する『羊をめぐる冒険』（1982、以下



『ノルウェイの森』の訳本各種

『羊』と略す)であった。ちなみにこの冒険物語の前作『1973年のピンボール』(1980)で、「鼠」はジェイの住む港街を後ろ髪を引かれる思いであとにしている——「ジェイ……。／何故彼の存在がこんなに自分の心を乱すのか鼠にはわからない」。

このように村上春樹のいわゆる青春3部作(1978〜1982)とは「僕」

とその分身「鼠」、そして2人よりも20歳年長である中国人ジェイの3人が語りあう歴史の記憶なのである。これに続く『ねじまき鳥クロニクル』(1986〜94)はノモンハン事件と満州国の記憶を辿る物語であり、『中国行きのスロウ・ボート』『トニー滝谷』などの短篇小説群は中国への贖罪の意識、歴史忘却への省察であり、『海辺のカフカ』(2003)や『アフターダーク』(2004)は、たとえば香港では「内心に潜在する暴力の種を反省するよう日本人に呼びかける」作品として読まれている。

その一方で、中国・香港・台湾の中国語圏では村上受容の4大法則が見いだされる。「村上春樹現象」は第1に台湾↓香港↓上海↓北京と時計回りに展開し、第2に台湾であれば89年、上海であれば98年と各地で高率の経済成長がほぼ半減する時期に発生している。また中国語圏では(韓国も同様だが)80年代末に民主化運動が勃発しており、無血の改革により民主化を実現した台湾と、あの悲惨な1989年6月4日天安門事件で民主化の展望を失った中国と明暗を分けた。それでもこの民主化運動が各地の村上受容に、濃淡の差はあれ強い影響を与えている。私は拙著『村上春樹のなかの中国』

(朝日選書)で、これらを「時計回り」「経済成長踊り場」「ポスト民主化運動」の3法則と呼んでいる。

そして第4の法則が「『森』高『羊』低」である。日本では『ノルウェイの森』(1987、以下『森』と略す)をきっかけとして村上ブームが起きたが、英訳はむしろ『羊』が先行して1989年にアルフレッド・バーンバウム訳が出ており、『森』は2000年に英語版が刊行された。『羊』高『森』低の傾向はフランス、ドイツ、ロシアでも同様で、それぞれ『羊』の1990、91、98の各年刊行に対し、『森』のほうは1994、2001、03の各年と4年から10年遅れで刊行されているのだ。『ねじまき……』『海辺……』も欧米では高い評価を受けており、世界文学において村上とは東アジア史をめぐる日本人の記憶を欧米人に語る作家とも位置づけられよう。この点も評価されたのであろう、この数年、ノーベル文学賞の季節を迎えるたびに有力候補の一人としてHaruki Murakamiの名が挙がっているのである。

これに対し台湾・香港や韓国での村上ブームは、1989年に「100%純情率直」(台湾版のコピー)と称される『森』翻訳版の大ヒットから始まった。

そのいっぽうで『羊』の翻訳は遅れて、台湾では頼明珠訳が1995年に、中国では林少華訳が1997年（韓国語訳も同年）刊行と『森』よりも数年あと回しにされたうえ解説も省略されるなど、冷遇されている。

中国語圏の村上受容には4大法則が共通するいっぽうで、明らかな相違点も見いだせる。台湾ではお洒落なカフェ「ノルウェイの森」や「海辺のカフカ」が若者の人気を集め、高級マンション「リッチ村上」が中年の購買意欲をそそるなど、村上ブームは文学の枠を超えて社会現象となっている。香港ではウォン・カーウアイ（王家衛、1958年上海生）が『森』を読んで名作『恋する惑星』を撮り、アーツ監督へと脱皮するなど、映画界への影響が顕著である。中国では『上海ベイベー』衛慧（ウェイ・ホイ、えいけい、1973）や『さよならビアン』の安妮寶貝（アニー・ベイビー、1974）ら、村上チルドレン作家が活躍している。

東アジアにおける村上ブームはこの地域で戦後長らくモダン・クラシックと見なされてきた魯迅（ルーシユン、ろじん、1881～1936）を連想させる。実際、村上は高校時代に魯迅を愛読してい

たようすで、その影響のあとは『風』から『1Q84』に至るまで、随所に色濃く出ているのである。

(4) 中国の村上チルドレンと日本の「中国村上チルドレン」のチルドレン

中国の村上春樹チルドレンの一人が衛慧（ウェイ・ホイ、えいけい、1973）で、代表作は『上海ベイベー』である。この小説は、中国では過激な性描写

参考文献：藤井省三著、張明敏訳『村上春樹心底的中国』



藤井氏の著書

のため発売禁止になったが、韓国・欧米で大いに話題になり、日本でも同書翻訳が30万部も売れて国民的国語辞典『広辞苑』第6版に「衛慧」で立項されている。ちなみに『広辞苑』は日本人は物故者のみを立項するが、外国人は健在の方でも立項している。

『上海ベイベー』（桑島道夫訳、文春文庫）は、ココというニックネームの女性主人公「私」により語られる物語で、そのあらすじは以下の通りである。ココは上海の名門校復旦大学を卒業後、出版社の編集者をしていたが、どうしても作家になりたくて、エリート街道からドロップアウト、昼は喫茶店でウェイトレスのアルバイトをして、夜に小説を書いていたところ、喫茶店の常連客の天天から求愛され彼の高級マンションで同棲し始める。天天は高校卒業後も働かず、大学にも行かず、好きな絵——素人としてはなかなかいい絵——を画いて暮らす高等遊民で、スペインに出稼ぎに行っている両親の送金で暮らしている。ところが父が突然の不審死を遂げ、母がスペイン人コックと再婚したため、天天の父方の祖母は、うちの嫁が保険金殺人をしたのだと言い、天天はそれがショックで性的不能者になっていた。このため天天とココとは深く愛

し合っているが、性的関係はない。ココは天天と同棲し始めた後は、昼は小説を書いて夜はバーに遊びに行くようになり、ドイツ人商社マンのマークと知り合い、トイレでファックしてしまうという過激な関係になっていく。こうしてココを中心に形成される天天との精神的結合、マークとの肉体的結合という三角関係は、『森』のワタナベ君と直子および緑との関係を男女を逆にしたものであり、『上海ベイベー』に対する『森』の影響が想像される。

安妮寶貝(アンニー・パオペイ、Annie Baby、アニー・ベイベー、1974〜)は、中国の若い女性の間で最も人気を博している作家で、『さよなら、ビビアン』(2002年)という短編集でデビューした。彼女は大学卒業後に銀行員をしながら、短編小説をネットに連載して話題になり、職業作家になったのである。その文体といい、上海の「小資」として豊かだが孤独で物憂い暮らしを送る登場人物たちといい、登場人物名を漢字ではなくローマ字で表記するなど、村上春樹の影響が色濃い。

衛慧や安妮寶貝がいわゆる「70後」世代(1970年代出生世代)とすると、田原は「80後」というさらに若い世代

の作家である。高校時代に村上春樹を耽読して『ゼブラの森(原題：斑馬森林)』という小説を書いてデビューし、さらにロックグループのボーカルとしても有名になり、外国語名門校である北京語言大学の学生時代には香港映画にも出演して映画女優にもなった。彼女は日本では代表作の翻訳『水の彼方 Double Mono』(泉京鹿訳)が講談社から出ているほか、ロック歌手としても有名で、サイトを開くと、熱烈な日本人ファンが田原絶讃の文章を書きこんでいる。

東大中文研究室では日本・中国・台湾の院生が2011年6月に「東大中文村上春樹研究会」を立ち上げて、活発に活動している。その会員の多くが、村上春樹および中国・香港・台湾・韓国の村上チルドレンに深い関心を寄せ、自分らの研究テーマとしているのである。

前述のとおり「中国語圏における村上受容4大法則」の一つとして、80年代後半以来「時計回りの法則」に従い、東京から始まったブームが台湾→香港→上海→北京へと伝播した。その時計針がさらに進んで周回を終え、今や日本に帰って来ているのである。いわば村上ブームが東アジアを一周したのち、村上チルドレン・ブームへと膨らんで日本に戻ってき

たのだ。これからの日本では、中国の村上チルドレンを読んで批評家や作家になる人が出てくることであろう。それは村上春樹の孫たち、東アジアの村上グランド・チルドレンの誕生である。東大中文村上研究会は村上春樹からそのグランド・チルドレンまでを研究対象としている一方で、研究会自らもグランド・チルドレンなのである。

本稿では紙幅の関係で、莫言についても中国の村上春樹現象についても、十分には語れなかった。詳しくは拙訳の莫言短篇集『透明な人参』(朝日出版社、2013年)収録の解説「莫言の人と文学」および拙著『村上春樹のなかの中国』(朝日選書、朝日新聞社、2007年)をご参照いただきたい。

(2012年12月19日・アジア研究懇話会)

講師略歴 (ぶじい しゅんてい)

1952年 東京都生まれ
東京大学大学院博士課程修了
中国文学専攻 文学博士
著書『現代中国文化探検』『台湾文学の百年』ほか多数
訳書 魯迅、莫言の作品など多数

《公開講演会記録》

バーリンホウ（80後）の中国若者文学

中国文学翻訳家 泉 京鹿



ご紹介にあずかりました泉京鹿と申します。矢吹先生のご紹介にもありましたように、この名前は、昨年結婚するまで、生まれたときから使っている本名でした。日本では「東京の京に馬鹿の鹿」と自己紹介していましたが、北京では「北京の京に梅花鹿の鹿」と北京に縁があることを強調した自己紹介で、ウケを狙っていました。

おそらく私よりもずっと長く、中国と深くおつき合いをしていた諸先輩方の前でこのようにお話しをさせていただくことは、とても緊張いたします。

私は大学を卒業後すぐに北京に留学し、昨年まで、基本的にはずっと北京で生活していました。これまでの人生の半分とはいませんがそれに近い、16年ほど

を中国で生活していましたので、まだどこか日本の生活に馴染めないので、まだあります。とはいえ、私が日本を離れる前に比べると、池袋や新宿あたり、銀座やこの新橋でも、街で中国語がたくさん飛び交っているのも、それを耳にするたびにホッとしているような次第です。

「70後」と「80後」

「80後（バーリンホウ）」はご存知のように「80年代生まれ」の若者たちという意味です。その80年代生まれの作家たち、それから同じく80年代生まれであるその読者たちについて、私が翻訳してきた作品や読んできた作品を通じて、また「70後（チャーリンホウ）」、70年代生まれ

の作家や作品とも比較しながら、お話させていただきます。

私自身は70年代生まれです。70年代といっても71年ですから、60年代に近い方です。で、正直に言って、今の80後にはジェネレーション・ギャップを感じることも少なくありません。ですが、だからこそ、自分の世代とはギャップのある彼らの作品やその世界を読むことや翻訳することに、喜びや意義を感じています。

今や年齢でいえば30代にさしかかり、中国社会の経済界、文化界を担う中心的世代ともなった80後ですが、彼らの世代が注目されるようになり、「80後」という呼び方自体が使われるようになったのは、その大部分がまだ10代から20代前半だった2004年前後のことでした。今

ではこの世代全体を指して使われていますが、もともとは80年代生まれの若い作家たちを指す言葉として使われたのが最初だったはずです。この点からも、この世代の作家たちやその作品がこの80年代生まれを象徴するものであり、これまでの世代とはきわめて異質な存在として注目を集めたことがわかります。

この世代は、ご存知のように1979年にスタートした一人っ子政策の影響で、兄弟姉妹のいない、一人っ子が多いということが一つの特徴です。ほかに兄弟がいる場合でも、末っ子が多いということになります。「小皇帝」という言葉に象徴されるように、祖父母、両親から大切に手をかけられて育てられた子供たちです。

また、80後は食べるものに困ってひもじい思いをしたことがない、という人が格段に増えた世代でもあります。大都市であれば、中学生になる頃には、自分の家や身近な近所の家にパソコンや携帯電話、自家用車があり、海外に出張や旅行に行くということがそれほど特別なことではなくなった最初の世代です。

上の世代から、「另類」(オルタナティブ)、「いわゆる「新人類」と呼ばれた中国の70後は、幼い頃には下放された両親

と離れ離れに暮らしていたり、親戚などに預けられてあちこちを転々としていたり、食べるものも十分ではなく、ひもじい、辛い思いをしたという人が少なくありません。私は彼らと同世代ですが、私たち日本の70年代生まれにはそういう記憶がないので、この点においては日中間での子供時代、思春期の体験の違いが顕著です。

中国の70後は、その後、中学生や高校生の際に89年の天安門事件を目の当たりにし、また、改革開放で豊かになっていく中国や世界の国々の状況をつぶさに見て、物質的な豊かさに憧れ、それを欲し、ハングリーにそれを求めるようになります。少なくとも、みんながみんな、それほど生活レベルがかわらない社会主義的なものにこだわったり、縛られたりするようなことはありませんでした。どちらかといえば、そこから逃れたがった世代です。従来の価値観、単位(注・既存の社会的組織的枠)社会を飛び出して、頑張れば豊かになれる、もっといい生活ができると思っていて、勉強や仕事、商売に必死に励み、豊かさを求めて海外に留学したり、起業したりすることがブームになりました。

70年代生まれの作家といえば、『上海

寶貝』(邦訳は『上海ベイベー』文春文庫)が1999年に中国で発禁処分となったあと、世界50カ国以上で翻訳が出版され、各国でベストセラーになった衛慧が代表的な存在として知られています。この『上海ベイベー』の前とその後それぞれ書かれた衛慧の作品、『像衛慧那樣瘋狂』『我的禅(嫁給佛)』(邦訳は『衛慧みたいにクレイジー』『ブッダと結婚』ともに講談社)という二つの作品を翻訳しました。

自伝的小説ともいわれる作品の多い衛慧ですが、『上海寶貝』には、その大胆な性描写をはじめとする退廃的な若者の生活、ストレートな欧米の社会や文化へのあこがれ、賛美が顕著でした。それは中国の伝統や文化、社会への反発の裏返しでもありましたから、問題として取り沙汰され、ひいては発禁、という結果に至ったのです。

実際、70年代生まれの彼女たちが現実生きてきた歳月は、その作品に描かれている世界同様、まさに中国の社会や生活、価値観が大きく変化してゆく一つの転換期だったでしょう。

そんな時代に青春時代を過ごし、社会へと飛び出していったこの世代の作家たちは、これまでタブーといわれてきたも

のに対して、まっすぐに向き合い、描こうとしました。

読者の多くは、作家自身と同世代から若い人々でしたが、前衛的なその作品の世界に憧れを持ちながら、それは遠い世界のことではなく、「自分だって……」と思いながら読んでいた人が少なくなかったようです。夜な夜な世界各国から来た外国人のあふれるレストランやバー、ディスコ（今ならクラブ、ですね）などに入りしたり、親の月給に相当するくらいの高価ブランドの服や化粧品を買ったり、海外に留学したり……。

そんな、「してみたい」ということを実際にやってみるために、純粋に欲望を満たすために、懸命に努力し、次々にそれらを手に入れてゆく。たとえば、そういうことでした。幼いころにお腹いっぱい食べられなかったという苦しい思いを経験しているからこそ、食べ物に貪欲でぜいたくな食べ物にも目がなく、もっといい生活をしたいと願い、そのための努力は惜しまない。それが、70年代生まれの人々の生活に顕著なモチベーションでした。

そして、この世代の作家たちが大胆な性描写を作品に盛り込むのも、これまでタブーであったものだからこそ、描きた



田原

いという欲求があり、また読者が欲するからにはかなりません。また、従来の価値観への挑戦でもあったのでしょう。そのため、衛慧のように70後の作家の作品でとくに過激な性描写などが取りざたされるのは、彼らの世代の特徴でもあり、思春期の若者たちの社会の風潮に対する反逆の形であったのです。

以上の二点をふまえて70後と比べてみると、80後の特徴がよくわかるのではないでしょうか。簡潔にいうと、まず、大都市だけでなく地方都市や農村で育っていても、ほとんど食べ物に困ったことがありません。そして日本を含む欧米社会、世界との距離感が、70後に比べ、ずっと近くなっています。外国へいくの

は、もう憧れでも目標でもなく、選択肢の一つになっていて、その気になれば比較的簡単に選べる、生活の中にある、と言えбайいのでしょうか。読者たちの世代の生活がそうであると同時に、この世代の作家が描く作品の中にそれは現れています。日本のアニメ、映画、ゲーム、アイドルなどが頻繁に登場人物たちの会話に出てきたり、家族や友人が海外に旅行に行ったり、外国人が身近にいたり、ということがごく自然に物語の中に描かれています。

もうひとつ、70後の作品ではとかく取り沙汰された性描写ですが、私自身がこれまで読んできた80後の作品には、翻訳したものも含めて、せいぜい30作品くらいのサンプルしかありませんが、具体的な性描写といったものがほとんどありません。それは、恋愛や性をテーマにしている、ということではなく、この世代にとって、もはや性はタブーではないため、とりたてて強調するものではないなった、ということなのです。

昔、日本でもベッドシーンなどがタブーで、テレビや映画などで男女が見つめ合ったら暗くなり、次の場面は朝になっているというふうな、男女の間に何かがあったことの描写がすっぱり抜けて

いて、観ている者が想像するしかないという時代があったと思いますが、そんな感じですよ。80後の小説でそういうシーンが極端に少ないのは、タブーに挑んできたその前の世代との一番の差かもしれません。

タブーのない世代

たとえば、今年の6月に邦訳が出たばかり拙訳・郭敬明の『悲しみは逆流して河になる』ですが、高校生の恋愛、いじめ、親との葛藤などとともに、妊娠、中絶といった問題が描かれています。当然、性もテーマの一つと言っているものではないですが、具体的な性行為の描写はなく、その後のことがストーリーには重要であり、性描写そのものには重きが置かれていないことがわかります。

そのことについて、この郭敬明、それから以前翻訳した『双生水莽』（邦訳『水の彼方』Double Mono）（邦訳の著者である田原にも、またアメリカの『TIME』の表紙を飾ったこともある80後の春樹という作家にも直接尋ねたことがあります。彼らの答えは「前の世代がやっているのをさんざん読んできたから」「自分にはほかに書きたいことがあ

るから」「読者が読みたいのはそういうものではないから」というもので、そういったものを描かないことが自然であると同時に、半ば意識的に、そういうものを排除してさえいるような印象も受けました。

では、そんな彼らの作品を、日本の同世代はどのように読んでいるかといいますと、この数年、横浜にある母校のフェリス学院大学での集中講義で、学生たちはいくつかの作品を読んでもらい、感想を聞いて見たことがあります。彼女たちは中国語学習者ではなく、ほとんどが中国に行ったこともないという、ごく普通の女子大生たちです。彼女たちは声をそろえて、「地名と人名を変えたら、日本の小説を読んでいるのかわからない」「読みやすいけれど日本の携帯小説よりは文学的」「感覚がほとんど同じ。共感することばかりでびっくりした」とその感想を語ってくれました。

彼女たちの話は、私には「目からうろこ」でした。翻訳している私にとって、80後の作品は、70後以上に価値観の違いに戸惑うことが多かったのですが、これは中国だからというのではなく、日本でも同じだということなのでしょう。実際、私が長年日本を離れていたからとい

うこともあるかもしれませんが、日本の10代、20代の若い人の感覚には理解できないところもたくさんあります。でも、それは日本独自、中国独自というものが若干はあるとしても、多くは世代独特のもので、日中間の違いは私たちの世代よりもずっと少なく、小さくなっているというのではないのでしょうか。

お手元にお配りしたのは、朝日新聞の日曜日に月2回挟みこまれている横書きの紙面『GLOBE』で連載している『世界の書店から』というコラムです。私は北京を担当してしまっていて、3カ月に一度くらいの割合で北京のベストセラーを紹介しています。すでに『GLOBE』紙上に掲載されたもので、ネット上でも読めるようになっていきます。

たとえば、2009年6月8日付の『一族』と『家』の重さ、ささやかな幸せ」というタイトルの記事ですが、ここで紹介している『西決』の著者の笛安は、記事にもあるようにパリに留学経験のある80後作家です。この作品では、80後の作品ではよくテーマになる親との葛藤だけでなく、それ以外の家族、親族との関係や感情が丁寧に描かれています。80後の中では珍しい、貴重な存在の作家だと思います。この記事にも書きました

が、中国では「おじ」や「おば」、「いとこ」などの呼称が、父方か母方か年長か年少かで、明確に区別されています。一人っ子政策の結果、こうした呼称はこのままでは無形の遺物となり果ててしまいます。この作品の中では、いとこ同士が兄弟のような存在で、それぞれの家族もとてもちかしい家族として描かれています。が、もともと中国語の「家族」は日本



講師の雑誌記事

語の「家族」より範囲が広く、「一族」「親族」にあたります。この記事では、たまたま同じ時期にベストセラーになっていた張愛玲の作品とともに、時代はまったく異なるのに、一族の話がこまやかに描かれ、中国の「一族」「家」の重さを感じ、非常に面白く読みました。

それから、2011年1月24日付の「80後が見せるネットと書物の力」というタイトルの記事では小説だけでなく、ブログなどを通じて政治に対して、若者の気持ちを代弁した挑発的な発言をするなど注目も集めている80後作家・韓寒の最新作を紹介しています。彼の小説には、政治や社会に対する風刺を盛り込んだメッセージがこめられているものが多いです。

韓寒といえば昨年、「国内に対して平和的なデモのできない民族が、外国に対していかなるデモをしたところで何の価値もない。そんなものは単なるマスメームだ」と結んだ文章を、中国で「国恥記念日」とも呼ばれる満州事変の発端となった柳条湖事件が起こった9月18日にネット上にアップしたことが波紋を呼びました。その直前に発生した尖閣諸島沖漁船衝突事件を受けて、日本に抗議するデモを起こそうという中国の若者たちの

動きに対するものだったからです。結局、この文章は中国当局によって削除されましたが、その当時に総アクセス数4億を超えていた彼のブログですから、アップされて5分後に削除されても、あつと言う間に膨大な数のコピーがうちに転載され、いまでも随所で見られるようになっていきます。

最新作の『1988：我想和這個世界談談』（「1988：この世界と語りたい」）の中には、まだ中国ではタブーになっている天安門事件のことが書かれています。といっても、そのまま書いてあったら、おそらく発禁になっていたでしょう。そのものの描写やそれを指す言葉はまったく、出てきません。主人公が兄のように慕う大学生が、ある年の春から夏にかけて北方（北京）に行って、亡くなります。具体的な時期も理由も書いていません。

しかし、中国人なら誰でも知っているドラマの主題歌が流行った翌年に彼が死んだとあり、その流行が1988年だったことから、それが1989年の春だということがわかるようになっていきます。何気なく読んだら見過ごしてしまいがちですが、ここには明らかなメッセージがこめられています。あからさまな政府批

判をするのではなく、このような巧妙な形で読者へ、社会へ、メッセージを発するのが韓寒です。

これらの作品はまだ邦訳はありません。お配りしたもののか、インターネットで『GLOBE』の記事を読んでいたければもう少し詳しくご理解いただけたと思いますのでお目通しください。

彼らの素顔

さて、私は北京に住んでいたこともありまして、翻訳をした作品の作家さんたちとは、翻訳に際して実際に会って作品について語りあったり、その後も親しいおつきあいをさせていただいたりしています。彼らの素顔について少しお話ししたいと思います。

先ほども何度か名前を出しましたが、70後の衛慧とは、プロモーションなどで3回、一緒に日本にきました。同じ部屋で宿泊したこともあります。上海では、何度か一緒に上海ガニを食べました。レストランで食べたこともあります。フランス租界にある古い洋館を改装した彼女の家で、彼女のお母さんが市場で買ってきてくれた洗面器いっぱいのカニをお腹いっぱい食べたことが忘れられ

ません。『上海ベイビー』を書いた当時の彼女は、主人公のココさながらに、お酒もたばこもディスコも大好きな、かなり派手な女性だったようです。

私が親しくなったのはそのあとのことで、タバコもお酒もディスコ通いもまったくしなくなっていました。その後、私が翻訳した『上海ベイビー』の続編である『ブッダと結婚』の主人公同様、仏教に帰依して、非常にシンプルな生活を送っていました。しばらくして、少しはつきあいでお酒も飲むようにはなりましたが、普段はひたすらお水を飲むだけで、お化粧もせず、上海ベイビーのころの彼女のイメージとはかけ離れた、ほんとうに地味で、静かな人間に変わっていました。

仏教は、これは70後、80後に共通して、この数年、流行っているといっているかもしれません。仏教徒になったり、仏教思想の本を熱心によんだり、という作家、若者たちが増えています。衛慧だけでなく、田原、アニー・ベイビーもそうでした。

その中でも、80後の田原は仏教に帰依したことから、今ではまったく動物性の食品を口にしない、かなり厳格なベジタリアンです。彼女とも二度ほど日本国内

を旅行したことがあります。これは正直言ってかなり大変でした。

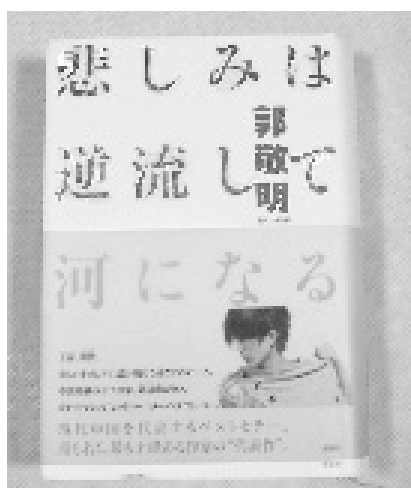
日本食にはだしに鰹節がつかわれていますが、彼女にはこれはアウトです。日本そばが大好きな彼女とお蕎麦屋さんに入っても、彼女はそばつゆを口にできません。昆布だしにみりんや醤油でベジタリアン用のめんつゆをつくってくれた親切なお蕎麦屋さんもありましたが、普段はわさびと醤油をつけながら食べていました。そんなことで外では自由に食事ができないことが多く、事前にお店を見つけれなかった場合に、コンビニエンスストアでお赤飯のおにぎりを買ったたりしたことも少なくありません。日本料理はシンプルですが、だしの入っていない料理が実に少なく、ベジタリアンには意外に難しいということは、彼女と一緒にいてはじめて気がつくしました。

本人は70後ですが、80後に絶大な人気のあるアニー・ベイビーとは、東京、箱根、京都、奈良、松山、木曽路、松本などを二週間かけて旅しました。彼女も仏教思想を熱心に勉強していますが、田原のような厳格なベジタリアンではありませんので、あちこちでいろいろ食べ歩きをしました。中でも、京都の町屋を改造したカウンターの料理屋さんはとても気

に入っていたようです。この8月に彼女の5年ぶりの新作長編『春宴』が発売されました。私も彼女から送られてきたその本を最近読んだばかりなのですが、この小説のラストシーンは京都が舞台でした。主人公の二人の中国人女性が日本酒を飲みながら語り合う場面を読んで、私と一緒に飲んだ時の記憶が小説になっているのを、とても不思議な気持ちで読みました。

またこの作品には、明記されているわけではありませんが、柳宗悦（やなぎむねよし）の『手仕事の日本』（岩波文庫）という本を片手に、日本の伝統工芸の職人さんたちの仕事の現場を丁寧に見て回った彼女が感じた、日本の伝統工芸、手仕事への思いがあふれています。初版120万部で、現在中国各地でベストセラーになっています。ぜひ日本語に翻訳して紹介したいと思う本です。

最後に、郭敬明ですが、『クーリエ・ジャポン』という雑誌の9月号に、郭敬明が自宅できつろぐ写真が掲載されています。この写真の通りのイケメンです。彼に実際に会う前、雑誌やネットで見るといつもあまりに美しいので、「きつとメイクとライトのあて方など撮影の技術のおかげだろう」などと失礼なことを



『悲しみは逆流して』（郭敬明）

考えていたのですが、実際に会ってみたら、ほんとうに写真のとおり美しい、素敵な男の子でした。

でもある日、昼間オフィスで会ったら、なんとなく雰囲気違っていて、夜、レストランで待ち合わせをしたらいつもの顔になっていたもので、昼間見たのはスッピンの顔で、普段はメイクをしていたことがわかりました。でも、素顔のほうが可愛らしいといえますか、そのままだでもほんとうに美しかったです。高級ブランドで身を固め、運転手つきの高級外車に乗っているその姿は、とくに中国では汚れやすいからとあまり好まれない、真っ白な服を着ていることの多い彼は、童話の中に出てくる王子様のようです。ベストセラー作家としての郭敬明に



雑誌に載った郭敬明

は、盗作、剽窃疑惑がつきまとい、毀誉褒貶がたえませんが、独特の美しい言葉をつむいだ文章で、次々に作風の違う作品で読者を楽しませてくれるその筆力は貴重な存在だと思います。さらに、毎月50万部を超える売り上げを誇る雑誌を何冊も発行する編集者として、若手クリエイターや斬新な企画を生み、育てるプロデューサーとしてのその才能とビジネスセンスには、目を見張るものがあります。日本にはまずいないタイプの作家で

すし、年々厳しい状態にある日本の出版業界から見ても非常にまぶしい注目すべき存在であることは間違いありません。

彼の作品にも日本のサブカルチャーはつねに登場します。彼らにとって、日本とはとても身近な国です。昨年初めて訪日し、さらに日本が好きになったと言っていました。これからも彼の作品の中には日本のものがさまざまな形で出てくるのではないのでしょうか。

郭敬明だけではなく、田原も、アニー・ベイビーも、編集長として文芸誌を発行しています。韓寒も『独唱団』という雑誌を創刊しましたが、創刊号のあと、事実上の廃刊となっています。彼らのほかにも、多くの80後作家が編集長の雑誌が発行されています。日本の雑誌からコンテンツを購入して翻訳したものを掲載するなど、彼らはみな日本の文化が大好きで、積極的に取り入れることにとても貪欲です。

それに対して、残念ながら日本の若い世代、いえ、若い世代だけでなく、日本人はまだ現代中国の彼らの生活や文化、彼らが読んでいるもの、見ているもの、聞いているもの、好きなもの……そういういった身近なものをまだまだ知らないと思います。

この話をするとても長くなってしまいましたが、日中間の翻訳の不均衡をみれば、それは明らかです。二年ほど前に、2009年に調査をしたことがあるのですが、日本の小説の中国語訳は確認できただけでも年間百点を超える数が翻訳、出版されていきました。かつては海賊版もありましたが、今はきちんと版權を取得しています。人気のある作品は版權取得に数社が争って高値で入札し、翻訳・出版に至るといいます。

しかし、中国の現代小説で日本語になっているものは、年間百点どころか、全部で数十点も危ういところですよ。小説以外のノンフィクションの翻訳は増えているようですが、小説は、中国で日本の小説が読まれているのに比べると、悲しいほどごくわずかです。

ですから、もっと日本の若い人に中国の小説を読んで、同世代がこんなにも同じ感覚をもっていることを、同時に同世代なのにまったく違う感覚ももっていること、また、彼らがこんなにも日本を知っていることを、そして彼らの文化や生活の中にもとても素敵なものがたくさんあることを知ってほしくて、私はこれからまだまだ翻訳を続けたいと思っています。

先輩方の世代には、若い世代の作品は文学的にまだまだ未熟で読むに耐えない、などとお感じの方も少なくないかもしれません。しかし、これからの中国を支えてゆく世代が、何を考えて、感じて、何を伝えようとしているのか、機会がありましたら、ちょっと覗いてみていただければ嬉しいですよ。

本日はどうもありがとうございました。

(9月2日・講演会)

講師略歴(いずみ きょうか)

1971年東京都生まれ。フェリス学院大学文学部卒。

北京大学留学。博報堂北京事務所勤務を経て、フリーランスに。

訳書に衛慧『衛慧みたいにくレイジー』『ブッダと結婚』(講談社)

アニー・ベイビー『さよなら、ビビアン』(小学館)

余華『兄弟』(文芸春秋)、田原『水の彼方』(Double Mono)

郭敬明『悲しみは逆流して河になる』(講談社)